



桜蝶 さくらちょう

学びナビ

視点

物語や小説では、さまざまなできごとが起こります。同じできごとでも、どの位置やどの人物から見たものかなど、さまざまな視点から語ることができます。視点は大きく二つに分けられます。登場人物以外（作品に登場しない人物）の視点と、登場人物自身の視点です。次の文章を比べてみましょう。

どこの山だか、わかりません。その山のがげのところに、家が一けんたっていました。木こりがすんでいるのでしょうか。

（浜田廣介 『泣いた赤鬼』の冒頭）

いつでしたか、山で道に迷った時の話です。ぼくは、自分の山小屋にもどるところで、歩き慣れた山道を、鉄砲をかついで、ぼんやり歩いていました。

（安房直子 『きつねの窓』の冒頭）

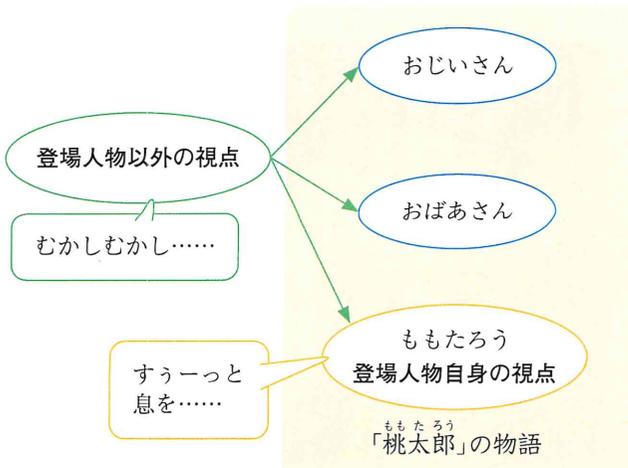
『泣いた赤鬼』は登場人物以外の視点から、『きつねの窓』は登場人物の「ぼく」の視点から語っています。

目標

- 行動や心情を表す言葉を文脈に注意して読む。
- 文学作品の構成や展開、人物の関係を描写から捉える。

視点

語り手／オツベルと象
入れ子構造（額縁構造）／少年の日の
思い出



では、視点が異なるとどのような違いが出てくるのか、昔話「桃太郎」を書きかえた作品の冒頭を例に考えましょう。まず、登場人物以外の視点から語った文章です。

むかしむかし、おじいさんとおばあさんがすんでいました。おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに行きました。ある日、おばあさんが川でせんたくをしていると、大きな桃がどんぶらこ、どんぶらここと流れてきました。

(『ももたろう』の冒頭)

次に、登場人物である桃太郎自身の視点で語った文章です。

すうーつと息をすいこむと、あまくてやさしい、いいにおい。ぼくは生まれる前、大きな桃の中にいました。すぐ外からは水の音。それ、どんぶらこ。また、どんぶらこ。

(フゲユウジ『桃太郎が語る桃太郎』の冒頭)

登場人物の視点から語ると、その登場人物の見方や感じ方がよく伝わります。一方、ほかの登場人物の気持ちや別の場所で起こっていることはわかりません。同じことでも視点によって描き方が変わります。どのような視点から語られているのかに着目すると、より作品の世界を深く読むことができます。

『桜蝶』のAとBについて、次の観点から整理しましょう。

・できごと ・場面や情景 ・登場人物の行動や心情 ・その他の特徴
また、AとBそれぞれの特徴について、視点的の違いと合わせて説明しましょう。



ヒント

- どのような視点から語られているか、考えてみよう。
- 違う視点から語ったら、作品の印象はどのように変わるか、考えてみよう。



桜 蝶

田丸 雅智
たまる まさと

A

白石^{しろいし}さんが学校帰りに公園の前を通りかかると、同じクラスの倉橋^{くらはし}君が一本の桜の木の前に立っていた。

「何やってるの？」

白石^{しろいし}さんが尋ねると、倉橋^{くらはし}君は振り返ってこう言った。

「桜蝶の旅立ちを見守ってて。」

そして、倉橋^{くらはし}君はこんな話をし始めた。

「春が来ると南から北へ、桜の木に留まりながら旅をする蝶がいて。それが、桜蝶っていう蝶で。この蝶がやってくると桜が一齐^{いっせい}に咲き始めるから、桜の開花を告げる蝶だとも言われててね。僕は^{ぼく}ここで偶然^{ぐうぜん}見つけて毎日観察してただけど、そ

ろそろ次の目的地に向かって飛び立つ気配を見せてるんだ。」

その時、倉橋君が「あっ。」と叫んだ。それと同時に信じられないことが起こった。目の前の桜の木から一斉に花びらが散ったかと思うと、地面に落ちることもなく、そのまま宙を飛び始めたのだ。よく見ると、それは花びらのような羽を持った淡いピンクの蝶だった。

蝶は渦を巻きながら天高く昇っていく。夕空を、ピンクの靄が北に向かって移動していく。

その美しい光景に見惚れながらも、白石さんはこう呟いた。

「春とはもう、お別れなんだね……。」

なんだか寂しい思いにとらわれていると、倉橋君が口にした。

「そうだね。でも、ほら、見てみなよ。」

その指さす方——南の空に目をやって、白石さんは声をあげた。緑の靄が飛んできているのが見えたのだ。

倉橋君はほえんだ。

「桜蝶はいなくなってしまうけど、今度は葉桜蝶が新しい季節を運んできてくれたみたいだね。」

B

「何やってるの？」

声をかけられ振り返ると、クラスメイトの白石さんが立っていた。

僕は言った。

「桜蝶の旅立ちを見守ってて。」

首をかしげる白石さんに、僕は桜蝶のことを教えてあげる。

僕が親の転勤でこの町にやってきたのは、春先のことだった。生まれ育った故郷を離れるのは寂しくて、特に友達との別れは本当につらかった。

そんな折、僕はこの公園で偶然にも桜蝶を見つけた。桜蝶——それは春が来ると南から北へと桜の木に留まりながら旅する蝶だ。この蝶がやってくると桜が一斉に咲き始めるので、桜の開花を告げる蝶だとも言われている……そう教えてくれたのは、故郷にいる親友だった。

僕は蝶を発見したその日から、公園へと毎日通った。そして、南の町から来た自分の境遇を桜蝶に重ねては、勝手に孤独を分け合ってきた。

けれど、そんな日々も、まもなく終わる——。



田丸 雅智「二九八七」

愛媛県に生まれた。シヨートシヨート作家。

著書に『夢巻』『海色の場』『おとぎカンパニー』
などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。



桜蝶が一斉に宙へと飛び上がったのは、次の瞬間のことだった。蝶はこれから旅立つのだ。さらに北の方へ向かって。

その時、飛んでいくピンクの靄を見つめながら、白石さんがポツリと言った。

「春とはもう、お別れなんだね……。」

それを聞いて、ハツとなった。僕の頭に別れぎわの親友の言葉がよみがえってきたからだ。

——別れは終わりなんかじゃない。始まりなんだよ——。

僕は白石さんにこう言った。

「そうだね。でも、ほら、見てみなよ。」

視線の先、南の空には緑の靄が浮かんでいる。

「桜蝶はいなくなってしまうけど、今度は葉桜蝶が新しい季節を運んできてくれたみたいだね。」